

加藤周一文庫公開講読会『羊の歌』を読む

「古きよき日の思い出」(1)

2022年3月12日

半田侑子(衣笠総合研究機構研究員)

(梗概)

本章は執筆当時のヴェトナム戦争の状況を踏まえ、過去を叙述する他の章と異なり、当時の現在を描く。

執筆当時のヴェトナム戦争の状況に焦点をあてながら、加藤の筆はアルジェリア戦争、朝鮮戦争におよび、複数の過去と現在を重層的に重ね合わせる。そして、ヴェトナム戦争を正当化するアメリカに太平洋戦争時の日本との共通点を見る。加藤は過去の自分が、日本の軍国主義を嫌い西洋に理想を抱いていたことを振り返る。しかしブリティッシュ・コロンビア大学で教鞭を執る60年代の加藤にとって、西洋はもはや「はるかに遠い国」ではなく、その政府にも加藤の呪った軍国主義日本との共通点があることを知っている。また加藤にとってヴェトナム戦争は、夕食を共にしたハンガリアの実業家とその細君ほどには「遠いアジアのいくさ」ではなかった。加藤は日常に身を置きながらも、「遠いアジアのいくさ」から目を背ける人物に対し、ナチスによるユダヤ人のホロコーストを引き合いに出し、「知らなかったのではなく、知りたくなかったのだ。あなたは信じないのではなく、信じたくないのだ…」と言う。

加藤にとっては、たとえ何人であろうと、子供が殺されているという事実に強烈な怒りを感じるのであり、「全く何の役にたたないのに、私はそのことで怒り、そのことで興奮する。…」のである。

「古きよき日の思い出」

- ・初出は『朝日ジャーナル』(1967年2月26日発行)、「古きよき日の想出」
- ・「自伝小説」(過去の事実と虚構が混じる)に組み込まれる現在、現実。
- ・なぜ「古きよき日の思い出」なのか。

岩波新書版に未収録のエピグラフ

雑誌掲載時にはエピグラフとして冒頭に以下の言葉が付される。

われわれがもの事をその名によって称ばなくなってからすでに久しい。

——Cato. (Gaius Sallustius Crispus : Catilina, LII.)

これはサルスティウス『カティリーナの陰謀』¹（以下、邦訳は栗田伸子訳）第52章のマルクス＝ポルキウス＝カトー²の演説の一節である。『カティリーナの陰謀』はカエサルの関与も疑われた国家転覆未遂事件を題材にとった作品で、引用はカトーがカエサルに続いて演説を始めた場面である。カエサルたちが、キケロ暗殺計画を含む武力によるクーデターを企てた者たちをどのように処罰するかを議論したことに対し、カトーは「事態は彼らに対して何を決議するかを審議するより、彼らから身を守るようにと警告している」という。

なぜなら他の悪事なら、それがなされた時に訴追するがよいが、この場合は、それが起こらないように前もって注意しなければ、起きてしまった時に裁判を求めても無駄なのである。都市が占領されれば、敗者には何も残されない。不死の神々にかけて、私はあなた方に呼びかける。あなた方、常に家屋敷を、別荘を、彫像を、そして絵画を^{レース・フブリカ}国家よりも重んじてきた方々に。もし、あなた方の秘蔵の品々を、それらがどんなものであれ、持ち続けたいと思うなら、そして御自分たちの楽しみのために閑暇を振り向けたいと望むなら、今こそ目を醒まされよ、そして国事に取り組まれよ。貢租や同盟国が受けた不正が問題になっているのではない。我らの自由^{リーベルタス}と生命が不確かとなっているのである。

（『カティリーナの陰謀』256頁）

冒頭で加藤が引用した一文は、このように「自由と生命」が不確かになっていることに警告を発する文脈で発せられる。岩波文庫版で該当箇所は「全く、既に久しく、我々は事物の真の呼び名をなくしてしまっている」（257頁）と訳されるが、この一節は次のように続く。

他人の財産を惜しみなく施すことが気前の良さと呼ばれ、悪事への大胆さが勇気と呼ばれるがゆえに、国家は極限状態に置かれたのである。よろしい。それが〔今の〕習俗なのだから、同盟国の財産を使って気前良くさせるがよい、また国庫の盗人どもに憐れみをかけさせるがよい。しかし彼らに我々の血を惜しみなく与えさせてはならぬ、また少数の悪人を助命させる一方で、すべての善き人を破滅へと赴かせてはならぬ。（『カティリーナの陰謀』257頁）

¹ サルスティウス『ユグルダ戦争 カティリーナの陰謀』栗田伸子訳、岩波文庫、2019。書名の表記は便宜的に『カティリーナの陰謀』とする。

² 小カトー（紀元前95-46）。この時はまだ若く、次期護民官でしかなかった。共和国制を守ろうとカエサル一派と対立し続け、カエサルへの恭順を拒んで自死した。娘ポルキアはカエサルを暗殺したブルトゥスの妻。（『カティリーナの陰謀』374頁）

(第一段落)

なぜ今太平洋のいくさのまえの東京を思い出すのであろうか ——と私は寝椅子に横たわり、白樺の梢の彼方に高く澄んだ夏の空を眺めながら、考えていた。それは米国の大学町で、隣にはオークランドの波止場があり、そこからは遠いアジアのいくさのために軍需物資が積み出されていた。

(1) 初出との異同

…眺めながら、考えた。夕暮灯ともし頃に海の方から這いあがってきて丘をつつんでしま
う霧は、いつも午前中には霽れる。その太平洋岸の大学町で、私は友人たちと一軒の家を
借り、短い休暇をたのしんでいた。大学の研究室では、何人かの Nobel 賞学者たちが、実験
に熱中していたにちがいない。入江の向うには、サンフランシスコの町があり、そこでは夜
になると《topless》の酒場が栄えていた。隣には Oakland の波止場があり…

(2) 米国の大学町

カリフォルニア大学バークレー校か³。

(カリフォルニア大学出版局から確認できるだけで2冊加藤の翻訳(『芸術論集』『羊の歌』)
が刊行されている。)

・加藤は60年10月からカナダのブリティッシュコロンビア大学に准教授として赴任し、
日本文化史を講じた(69年8月まで)⁴。

(3) 「遠いアジアのいくさ」

ヴェトナム戦争(1965年2月—73年1月)別紙表参照

1965年 2月 北爆開始(アメリカの直接介入)

1973年 1月 ヴェトナム(パリ)和平協定、米軍がヴェトナムから撤退。南ヴェトナム
政府と北ヴェトナム・解放民族戦線との戦闘は続いた。

・加藤によるヴェトナム戦争分析(1972年)

ヴェトナム戦争の源は、一九五四年ジュネーヴ協定成立の後、アメリカがサイゴンに
ゴ・ジン・ジエム Ngo Dinh Diem 政権をつくって、軍事顧問団を送ったときにさかのぼ
る。そのジエム政権はジュネーヴ協定を破り、南北境界線を封鎖して、予定された統一選
挙を拒否し、政治的弾圧を強化した。南ヴェトナムの大衆は反抗し、その反抗と弾圧の相

³ 鷺巣力先生から示唆を得た。

⁴ 鷺巣力「加藤周一略年譜」より(『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波
書店、2018、504頁)。

相互作用が、一九六〇年(民族解放戦線の結成) 前後から、あきらかな内乱となったのである。

アメリカ政府はその内乱を内乱と称ばず、「北側からの侵略」と称び、軍事的介入を強めた。一九六五年からは北爆をはじめ、大軍五〇万を投入し、ラオスを爆撃し、カンボジアに侵入し、一時中止した北爆をさらに大規模に再開し、北側の港湾を機雷封鎖したことは、人の知る通りである。

もしアメリカ政府がはじめから内乱を内乱と称んでいたら、戦争の口実はなかったろう。しかしアメリカでは政府のみならず、言論機関の圧倒的多数までも、決してこの内乱を内乱とは称ばなかった。(「ヴェトナム・戦争と平和」(『読売新聞』1972年11月21日-22日))

加藤周一のヴェトナム戦争論 ※福井優氏による調査結果と資料提供を受けた

1、「ゴールドウォーター5つの野望」『サンデー毎日』1964年8月9日号(『著作集9』には、「あめりか・一九六四—ヨーロッパからみたアメリカ」と題し収録)

→大統領選でのジョンソンの対立候補、「極端な保守主義者」バリー・ゴールドウォーター上院議員の言説を紹介、その台頭を危惧し、現実を離れた「冷たい戦争」の論理の徹底による「ヴェトナムのいくさ」拡大とキューバ危機の再来に警鐘を鳴らす。

2、「ベトナム戦争と日本」『毎日新聞』1965年2月16日付夕刊

→「日本政府の責任は米国を説得していくさをやめさせることに全力を傾けることでなければならない」

3、「過則勿憚改⁵—日韓会談とヴェトナム戦争」『世界』1965年4月号

→「このような悪循環のアジアにおける発展が、日本の安全にとって望ましくないことはいうまでもない。日本の安全とは、いくさにまきこまれたときに外国の軍隊を防ぐのではなく、—そのためには日本人の一部または全部が死ななければならないだろう、—|そもそもいくさにまきこまれないようにすることだからである。

悪循環を破る道はあるだろうか。それはおそらく、問題の国の大衆の民族主義的感情に強く支えられ、同時にその社会の前近代的な構造の根本的な変革のプログラムをもつ政治的勢力に、周囲から実際的な援助をあたえるということのほかにはあるまい」

4、「西洋ぼけの感想(下) 平和な国」『毎日新聞』1966年5月20日付夕刊

→日米のヴェトナム反戦の大衆運動について取り上げた最初の文章か。

5、①「欧州と日本(下)「ベトナムの子を救え カトリック教徒の報告に思う」」『毎日新聞』1967年1月11日付夕刊

②「カナダ便り(上) 広島とベトナム なぜ一般住民が大量犠牲に」『毎日新聞』1967

⁵ 過ちては則ち改むるに憚ること勿れ

年3月9日付夕刊

(第二段落)

周囲には、東京や私の過去とつながりのあるものは、何もなかった。ただ白樺の上の空だけが、三〇年代の末に私が眺めて飽きなかった信州の「昨日の空」に似ていた、といえるかもしれない。その青空の奥には、見えない航空機の描く白い雲の線が輝いていた。いくさの最後の年に、太平洋の孤島から発して、東京の上空に現れた爆撃機……その爆弾の頭上に降りそそいで来た日まで、その頃の私たちは、そういうことがあろうとは信じていなかった。

(1) 初出との異同

①私の友人たちは、三つのちがった大陸から、中欧とニュー・ジーランドと合衆国の東部から来ていた。東京や私の過去とつながりのあるものは、何もなかった。

②…そういうことがあろうとは信じていなかった。あるいは研先室の実験に没頭し、あるいは金もうけの工夫や、立身出世のことに忙しくて、いくさの成りゆきから当然の結論をひきだすことは毎日先へのぼしていた。あるいは小さな「家庭の幸福」を、風当りの強くない片隅にまもろうとしていたのかもしれない。

(2) 「その爆弾の頭上に降りそそいで来た日まで、その頃の私たちは、そういうことがあろうとは信じていなかった」

『青春ノート』ノートⅧ、「一九四一年十二月八日」

電車の中で、人は皆新聞をよんでいる。恐くは繰りかえしよんでいる。何故なら新聞にはひとつことしか書いてないから。ニュースと云うものは、如何に重大な、如何に痛切なニュースであろうと、所詮弾丸でもないし、飢えでもない。僕らの必要とする覚悟は弾丸に対するものであろう。或いは飢えに対するものであろう。そして、決して、ニュースに対するものではない。豊増昇のベートヴェンをききに行こうと思ったが、妹が心細いと云うからやめた。警戒管制の家で、ショパンのワルツをききながら、この文を草する。何も書くことがないと云うことを書くために、文を草するのだ。弾丸や飢えは僕を変えるであろう。勇気の要るのもその時であろう。それまでは如何なるニュースも僕を変えることは決してない。⁶

(第三段落)

⁶ 『加藤周一青春ノートー1937-1941』 鷲巢力・半田侑子編、人文書院、2019、二六七頁。

米国は数年まえに朝鮮に出兵して、少からぬ損害を被ったことがある。敗北もしなかったが、勝利も得られなかったその恨みは、軍部と右翼のなかに深く残って、後になってから、自由主義者の妥協的な対外政策への反感となってあらわれた。遂に共産主義者を「膺懲^{ようちやう}」しようということになり、ヴェトナムへ大軍を送るところまで、事態が発展した。勇みたった大司教は、「聖戦」のために兵士を激励し、大軍は圧倒的な武器をもって、「点と線」を占領する。政府は、現地にかいらい政権をつくり、大衆はこの政権を支持していると力説するが、解放戦線の抵抗は、少しも衰えない。そこで、「ハノイ」がけしからぬ、という理論が発明され、従っていわゆる「ホー・チミン・ルート」の爆撃ということになり、その結果相手方の抵抗が少しも衰えないと、今度は、本当の敵は「ハノイ」ではなくて、その背後の中国である、という。一方「東洋永遠の平和」を望む米国政府は、当方に全く「領土的野心がない」こと、各国「共栄の楽土」を建設する他には何の目的もないということを強調し、いつでも「平和交渉」に応じる用意があると宣言する。しかし同時に、「解放戦線を相手にせず」ということもつけ加えていた。

(1) 初出との異同

①削除された段落 私はその大学町で、「東部」から一日後れでとどく部厚な米国の新聞の、婦人の下着や家具の広告の間に、小さくはさまれている報道記事を見つけだしては読んでいた。

②…「点と線」を占領する。新聞は毎日勝利を伝え、戦局は好転しつつあると、数年間もいつづけ、その間に政府は、キー政権をつくって、現地の大衆はこの政権を支持しているはずで、悪逆無道の解放戦線に対する怨さの声は巷にみちている、と力説する。しかし解放戦線の抵抗は、少しも衰えないので、それはひとえに「ハノイ」が援けているからだ、という理論が発明される。従っていわゆる「ホー・チミン・ルート」の…

③「解放戦線を相手にせず」ということもつけ加えずにはいられない。もしそこで一部の知識人が、「いくさの当事者を交渉の相手にしないということは、つまり交渉しないということとほとんど同じことではないか、そもそも、ヴェトナムの人々は、解放戦線側であろうとなかろうと、外国の軍隊の介入を望んでいないのではないか」といい出したとすれば、そういう知識人は、ただちに「反米的」として「愛国者」たちから非難される……

(2) 朝鮮戦争 (1950年6月—1953年7月)

南の大韓民国(李承晩大統領、反共親米政策)と北の朝鮮民主主義人民共和国(金日成)が戦った。南は米軍、北は中国が援助し泥沼化。

(3)「膺懲^{ようちやう}」…暴支膺懲、日中戦争の始まった1937(昭和12)年ごろに盛んに使われたとされる。横暴な中国(当時の中華民国)を懲らしめよ、という日本軍のスローガン

(4) かいらい政権

グエン・カオ・キ（1930—2011）…モロッコのフランス航空士官学校を卒業、ベトナム人初のパイロットとなる。1963年南ベトナム空軍司令官に就任。1965年、グエン・カーン追放クーデターに成功、1967年まで首相。グエン・カーンへのクーデターに関して『世界』1965年4月号の巻頭「世界の潮1——南ヴェトナムの三重クーデタ」に次のような紹介がある。

こんどの一連のクーデタは、一言でいえば、軍内部の勢力争いといえるが、それだけではすまされないものを含んでいる。こんどのクーデタの真の問題は、グエン・カーン将軍の、たとえそれが表面的なものにすぎないとしても、反米、民族主義ないし中立主義的傾向にある。カーン将軍は昨年12月の“部分クーデタ”後の收拾をめぐって、米国と対立した。カーン将軍とテラー駐南ヴェトナム米大使との不仲は、以前から公然の秘密だったが、12月22日のカーン将軍の声明は、真っ向から挑戦状を叩きつけたといえた。「われわれの犠牲はヴェトナムの独立と自由のためであって、外国の政策に奉仕するためのものではない。外国や共産主義の奴隷として、恥ずべき豊富の中に生きるよりは、独立した主権ある国家の自由な市民としての誇りを持つことができるなら、むしろ貧困と清潔の中に生きたい」。(前掲『世界』、17頁)

(5) ホー・チミン・ルート…ヴェトナム戦争中の、ヴェトナム民主共和国(北ヴェトナム)から南ヴェトナム解放戦線への兵站輸送ルート。

(第四段落)

「汪政権」、「援蔣ルート」、「蒋介石政権を相手にせず」……三〇年代の日本は、むしろ今日の米国とはちがっていた。その頃の日本は貧しく、非能率的で、軍事的には今日の米国の何十分の一の力も持たず、軍事予算による学者の大規模な動員の代りに、「敵性語」の教育をやめてしまえという無邪気な軍人の支配している国であった。しかし国際的な世論は、あの頃も、ほとんど一致して、日本人が中国で戦っていることを非難していたし、その四面楚歌のなかで、「皇軍」はいよいよ「断乎たる」態度をとり、「臣民」はいよいよ「世界史的課題の悲願に慟哭」していたのである。

(1) 初出との異同

・削除された段落…およそその辺のところまでが、米国の六〇年代の話である。しかしこの話のなかの固有名詞(地名・人名など)を適当におきかえれば、それはそのまま日本の三〇年代の話にもなるにちがいない。「ヴェトナム」を「中国」に、「大司教」を「内閣情報局」に、「キー政権」を「汪政権」に「解放戦線」を「蒋介石政権」に、「ホー・チ・ミン・ルート」を「援蔣ルート」に、「ハノイ」とその背後の「中国」を「英米」におきかえて読み替えたなら、「解放戦線を相手にせず」は「蒋介石政権を相手にせず」になり、「反米的」は「それでもおまえは日本人か」になるだろう。→第四段落冒頭の「汪政権」、「援蔣ルート」、「蒋介石政権を相手にせず」にまとめられている。

・日本は貧しく、非能率的で、軍事的には今日の米国の何十分の一の力も持っていない

た。ぬかるみの道⁷は長く、暖房の不十分な冬は寒く、日本人の多くは、たしかに餓えてはいなかったが、決して食べすぎて肥ることを心配していたわけではない。そこには supermarket の代りに、支那そばの星台があり、五分毎に広告で中断される TV の代りに、第九交響楽を通して放送していた第二放送があった。また軍事予算による学者の大規模な…

(2) 汪政権…汪兆銘、中国国民党左派の政治家で蒋介石のライバル。日本との和平工作に応じ、大きく譲歩し、1940年3月南京に汪兆銘政権を樹立する。

(3) 「世界史的課題の悲願に慟哭」

① 「世界史的課題」→「世界史…」という言い回しは京都学派が好んで使った。

② 慟哭→「戦争と知識人」(1959)

日本浪量派は反合理主義的な立場から、明瞭に定義することのできない言葉を駆使して、読者の情念に訴え、戦争の性質を分析せずに、戦争支持の気分を煽りたてた。(…)

そこでしきりに用いられたのは、たとえば、「悲願」「慟哭」「憧憬」「勤皇の心」「悠久のロマンチズム」「民族といふ血で書かれた歴史の原始に遡る概念」というような言葉であった。「悲願」という言葉は今でものこっていて、「原爆実験の禁止は国民の悲願である」などという。要するに、その論理的内容は、原爆実験をやめてもらいたいと日本国民が思っている、ということにすぎない。「慟哭」というのは、つまり泣くことである。大へん悲しんで泣くことだといってもよかろう。日本浪漫派の魅力の半分は、「大へん悲しんで泣く」といったのでは何の変哲もない事柄を、「慟哭する」ということで有難そうにするしかけ以外にはなかった。それにひっかかったのは、戦争中だろうと何だろうと、ひっかかった側に物事を正確に考え正確にいいあらわす習慣が足りなかったからである。こういう安上りなししかけで理窟らしい理窟のできあがるはずがない。(「自選集」第2巻、378-379頁)

(第五段落)

こうして昔日本におこったことは、すべてそれが日本だからおこったことなのであろうか。しかしアルジェリアのいくさが始まったときには、私はフランスで暮っていた。仏軍のなかには、印度支那戦争の挫折感があり、しかもアルジェリア駐在の大軍は、本国の国民の戦争不熱心に反感を抱いていた。そこで「軍独自の立場から」現地で戦線拡大の既成事実をつくろうとする動きがあったし、また軍人のクー・デタによる政権奪取の試みもあった。反乱の軍人たちは、政権奪取には失敗したけれども、第四共和国の政府に既成事実の承認を強制することには、しばしば成功した。私は何度「アルジェリア平定は近きにあり」という声明を聞いたかわからないし、また、何度「国民解放戦線を相手にせず」という約束を聞いたかわからない。ドゥ・ゴール将軍がついに事態を救うまで、五〇年代後半のフランスにおこったいくつかの政治・軍事的現象は、中国の「泥沼」にいよいよ深く入っていった三

⁷ 「ぬかるみの道」…『羊の歌』「戯画」153頁参照。

○年代の日本に似ていた。

- (1) 初出との異同→同じ。
- (2) アルジェリア戦争、駐留軍人のクーデター→1958年5月アルジェリアに駐留するフランス軍の反乱
- (3) インドシナ戦争(1946-54)→日本の降伏直後、フランスが植民地化政策を復活しようとしたため勃発。インドシナ戦争の休戦協定、ジュネーヴ協定は、北緯一七度線で南北に分割し、一七度線以北をホー・チミン軍の勢力範囲とし、以南をバオダイ・ヴェトナム軍の支配地域とした。同時に一九五六年に統一選挙を行なうことを決めた。しかしゴ・ディン・ジエムがジュネーヴ協定を無視し、バオダイを追放しヴェトナム共和国を樹立、アメリカの援助を頼って独裁を行う。ヴェトナム戦争は当初第二次インドシナ戦争と呼ばれていた。加藤は、もしジュネーヴ協定が尊重されていたらと想像する文章をのちに発表する。

もしアメリカが一九五四年当時にジュネーヴ協定を尊重し、軍事独裁政権をサイゴンにつくらず、協定にしたがって二年後の選挙を支持していたら、今日もっと多くのヴェトナム人が生きていて、もっと多くのヴェトナム人が手足を具え、もっと多くのヴェトナムの山野に草が萌え花が咲いていたろう、と私は考える。アメリカは荒廃したヴェトナムの「共産主義者」に援助をあたえる代りに、ホー・チミン Ho Chi Minh の下に統一された平和なヴェトナムに今ごろ必要な援助をあたえていたであろう。今日アメリカの通貨の危機は深刻でなく、アメリカ式民主主義の権威は地に墮ちずにいたかもしれない。

(「越南自哀文」『世界』岩波書店、1973年4月号)

- (4) 「ド・ゴール將軍がついに事態を救うまで」→6月アルジェリア駐留軍反乱を受け、ド・ゴールの政権復帰を要請。ド・ゴール内閣成立、10月に第5共和制成立。
Cf.) 「ドゥ・ゴール体制とは何か」(初出『毎日グラフ』毎日新聞社、1963年8月25日、9月1日号、『著作集』第8巻収録)

(第六段落)

しかしその頃の東京に暮していた私は、むしろ他日アルジェリアで戦うだろうフランスを知らず、ヴェトナムで戦うだろう米国を知らなかった。私が知っていたのは、——いや、風のたよりに噂を聞いていたのは、《フロン・ポピュレール》のフランスと、《ニュー・ディール》の米国であった。「かしこには、ただ秩序と美と、栄耀と沈黙と自由」があり、身の廻りには、神がかりと混乱と、貧困と騒々しさと言論の徹底した不自由があるとか思われなかった。たしかに私は、ニーベルンゲンの神話や、「血と土」の騒々しい宣伝や、ハイネを抹殺し、トマス・マンを追出そうとしていた国の言論の不自由を、いくらか知らないわけで

はなかった。しかしドイツは、フランスや米国が遠かったように、はるかに遠い国であった。

(1) 初出との異同

・ニーベルンゲンの神話→初出ではニーベルンゲンの神がかり

(2) Front Populaire (フロン・ポピュレール) …ファシズム勢力の台頭に抗し、戦争とファシズムに反対の全勢力と組織を結集した反ファシズム統一戦線。

フランスでは 1936 年の選挙で大勝し、レオン・ブルムを首相とする人民戦線内閣が成立したが 37 年経済危機を克服できず退陣。

(3) New Deal ニュー・ディール (1933-35) …ルーズヴェルト大統領が実施した。恐慌克服政策、公共事業や失業対策を打ち出した。

(4) 「かしこには、ただ秩序と美と、栄耀と沈黙と自由」

→ボードレール『悪の華』の「旅へのいざない」の一節

Là tout n'est qu'ordre et beauté,

Luxe, calme et volupté.

(5) ニーベルンゲンの神話

→「ニーベルンゲンの歌」13 世紀に完成したブルグント族の大英雄叙事詩。民族移動期の史実や伝説に題材をとる。ワーグナーの『ニーベルンゲンの指輪』はこれを下敷きになっている。

(6) 「血と土」→ナチスの農業大臣兼農民最高指導者リヒャルト・ワルター・ダレが普及させた言葉。彼の著書『血と土』の邦訳の序に有馬頼寧が 1940 年、次のような一文を寄せている。「ナチス農業政策の真髄は実に本書にありといわれ、民族と国土との純粋さから指導者原理を打樹て、所謂第三帝国の建設に邁進せんとするドイツ帝国の理念と実践を組織したもので、新体制下祖国日本の真姿を権限し、臣道実践に挺身せんとするわれわれに、示唆し、裨益するところ甚大なるものがある」(『血と土』黒田礼二訳、春陽堂書店、1941、)

(7) ハイネ

「愛国心について」『夕陽妄語』(「自選集」第 10 卷所収)

「祖国への愛は情念である。自己批判は理性の働きである。理性的に統御されない情念は、しばしば自己陶醉を推し進めて、どこまで行くかわからない。愛国心は容易に排他的ナショナリズムになるだろう。その結果がどうなり得るかは、われわれのよく知るとおりである。ハイネは狂信的ナショナリズムへ向かったことがない。かれの知性は抒情詩の中へまで浸透し、常に鋭い皮肉となって生きていた。他方その祖国愛、または亡命地でこそ却って強められた愛国心が、彼の筆法を鈍化させたこともない」

(8) トマス・マンは保守的な非政治的生活から第一次世界大戦を経て転向し、反ファシズムの立場を貫き、38 年にアメリカ亡命した。